

## スタッフエッセイ 15 NO211(2007.10.30) ~ 225(2008.01.01)

211	クラス	田房絢子	2007.10.30
212	バツ地理！	新藤 理	2007.10.31
213	親切	芳賀 慈	2007.11.01
214	第14回開校記念日	亀貝一義	2007.11.05
215	「世界が壊れそうなくらい、自由になりたい」	椎名結実	2007.11.07
216	第1回定期公演を終えて	椎名結実	2007.11.22
217	定期演奏会	芳賀 慈	2007.12.04
218	大人の時間と子どもの時間	杉野建史	2007.12.05
219	しあわせ	田房絢子	2007.12.07
220	反省会(ブル部第2回定期演奏会・後記その1)	新藤 理	2007.12.14
221	内視鏡検査	亀貝一義	2007.12.20
222	あげる	芳賀 慈	2007.12.26
223	第1期生同窓会(「一期一会」)	亀貝一義	2007.12.29
224	2007年、旅立ち。	田房絢子	2007.12.30
225	それでも歩き続ける	杉野建史	2008.01.01

### 211 クラス 田房絢子 2007.10.30

いつも同じ速度で歩くことができなくて、少し遅くなったり、立ち止まったり、時に早足になったり。そんなことを繰り返しながら、人は距離を進めていく。もしかしたら、くるりと踵を返し、来た道を戻っていることだってあるだろう。それでも人は足を止めない。立ち止まることがあっても、歩くことを止めてしまうことはない。そう私は信じている。

幾つもの朝を迎えてきた。そこにいるのはいつもの顔ぶれ。全員が揃うことは決してない。来られないのはサボりなんだろうと、来られないのは努力が足りないんだろうと、そう思って、理解できない生徒もいる。もちろん中にはそういう理由もあるだろう。でもほかにも理由がある。みんなに理解されるには難しいものもある。「来たいのに来られないんだよ。それぞれいろいろあるのはわかってるよね？みんな別々のペースがあるんだよ」と訴える。登校に困難を示さない生徒たちに、それがどこまで伝わっているかわからない。しかし、速度が違いすぎていることに、苛立ちを感じているのは事実だろう。クラスとしての機能を十分に果たせないまま、今年も終わりに近づいていっている。クラスとして何かを残したいと思っているけど、うまくいかないじれったさ。みんなの顔が揃ってほしい

と願う気持ち。それはみんなが一番感じているだろう。

正直、全員の足並みが揃うことは難しいと思う。今はとにかくそれぞれが元気になってくれることを願っている。それぞれが元気になって、たとえ最初のチャンスが卒業式でもいいから、みんなと一緒に笑えたらと・・・。

「クラス」はまだまだできていない。でも決して止まることはない。いつでも必ず進みながら、ほんの少しでも変化しながら、形を変えながら、また明日を迎えるのだろうと、私は信じている。

## 212 バッ地理！ 新藤 理 2007.10.31

もう十年ほど前だろうか。ある年下の友人が切なそうに語った。

「こないださあ、テスト前の自習時間でクラスんなかシーンとしてたのね。うちのクラスすっごいマジメでさ。オレちょっとそういう空気耐えらんなくて、地理の勉強してたんだけど、おっきな声で『よーし、オレもう、地理バッチリ！』って言ったの。したらさ、クラスの人、全員無言だよ!? まったく無反応！ もうやだー、あんな学校」

「年下の友人」とは、古くからの友人の弟くん。当時まだ高校生だった彼は、市内のとある進学校に通っていた。バンドでギターを弾くかわらバイオリンもたしなみ、音楽の先生に「吹奏楽だけじゃなくてオーケストラも作ってくださいよう！」と直訴して玉碎していた彼。豊かな表情とオーバーアクションでその場に明るさをもたらすそのキャラクターは、確かに某進学校では少々浮いてしまったかもしれない。「地理バッチリ！」のエピソードも、そこはかとなく可笑しいながら日々の逡巡が目に浮かぶ、彼らしいエピソードだと思う。

先日試験を終えた高等部の生徒との会話。「いやー、他はダメだったけど地理はけっこう良かったさー」という彼女に、私は「おおー、そんじゃ『地理バッチリ！』だな」と言ってみた。彼女は嬉しそうに「そうそう！ 地理バッチリ！ いえーい」。

他校の生徒たちと比べる気はないが、何とというか、いい子たちだなあと思う。私たちの（時には捨て身の）ギャグに、良かれ悪しかれちゃんと反応を返してくれる。件の友人は、もしかしたら学校にこんな空気を求めていたのだろうか。今は立派な社会人となった彼に思いを馳せながら、「バッ地理バッ地理！ あ、でも他がダメだったってどういうことよ」と語り続けた。

そんな「年下の友人」は、とある新聞社の土別支局に赴任し、気付けばわが学園の和寒での特区申請に関する担当記者になっていた。何だろう、この偶然力？

## 213 親切 芳賀 慈 2007.11.01

「親切」というテーマで文章を募集すると、電車の中で席を譲る譲らないの話が相当数集まるらしい。お年寄りに「どうぞ」と言ったら「わしゃあ、そんな年寄りじゃない」と怒られたと、昨日の細木数子の番組でスタジオに来ていた一般人が言っていた。おまけに妊婦さんに譲ろうとしたら「これは全部お肉なのよ」と睨まれたというから、これはもう持ちネタの域だろう。だいたい「わしゃあ」などというお年寄りに、わしゃあまだ会ったことがない。

自分はどうかというと、今まで知らない人に「どうぞ」と声をかけたことはない。逆の

立場になって将来譲られることなんか想像したら、ちょっとドキドキしてしまう。もしかしてそのころには案外何も考えないのかもしれないけれど。

譲られる側にも選択肢がほしいと思うのだ。だから気になる人がいたら、黙って席を立つ。そして気になる人の隣にいた、(どうでも)いい若いモンにさっと座られればそれまで。縁がなかったと諦める。

これは「親切」ではなく自己満足。自分の後に誰が座ったかも気にせずその場を離れたいところなのだけど、そこはやっぱり気になって見てしまうのが小市民。思惑通りの人が座ってくれるのを目の端にしながら隣の車両に移るとき、何だかとても自分が偉く思えて晴れやかな一日になるのだ。

#### 214 第14回開校記念日 亀貝一義 2007.11.05

11月5日(月)は「開校記念日」で休校である。本当は11月1日であるが、今年は数日間ずらして記念することにした。

札幌市内の学校で11月1日を「開校記念日」にしている所は少なくない(「学校設置条例」によって設置認可が行われた)。

少々自由が丘スタートのころを記しておこう。詳細は「あるフリースクールの10年」にあるのでそこも参照して欲しいのだが。

1993年2月ころから、「フリースクールをつくる」ことが私たちグループの計画になった。このグループというのは、86年4月から進めてきた研究会(「新しい教育・学校をめざす研究会・新教研)」である。現在のスタッフでいえば、吉田弘さんや木村玲子さんと私である。月寒スクールの鈴木秀一さんは、全体の代表委員だった。

いろいろ議論・検討してオープンしたフリースクールは「学校の基準に至らない」のではあるが、ここを求めてきた子どもたちにとって大事な居場所であり学びの場、すなわちまぎれもなく「重要な意味のある学校」であった。

11月1日(月)6名の生徒からスタートした学園はどんどん生徒数が増えてきた。いろいろな経過があったが、現在の地に移ったのは02年8月のことである。フリースクール札幌自由が丘学園は、今高等部をあわせもつ全国的にも大いに注目されるスクールになっている(と思う)。

私を感じる札幌自由が丘のきわめて大きな特徴は、ここにはせ参じるスタッフがひとりひとり『どこにいても恥ずかしくない優れた人』であるということだ。スタート以来多くの方がたが関わってくれた。すでに鬼籍にある人(亡くなった人)もいる。

自由が丘の歴史を思ったとき常に第一番の位置にある柴田宏樹さんもそうである。またフリースクール開校式の時に、遠く厚木からメロディを伴った祝電を送ってくれた亡き藤田喜一さん(元札幌北斗高校長)も忘れることができない一人だ。

現在、文科省から「不登校対応の教育研究の委託」を受けているが、私は何度もいうのだが、私たちの教育実践は「不登校対応の教育」の意義をもちながら、学校と教育の全体に通じる本質に迫るものとしての意義をもっているはずだ。この記念日にあたって更にその趣旨を深めたい。過去と今日の多くの教師スタッフと進める共同の事業である。

この開校記念日は14回目である。来年は第15周年という節目の年である。そしてさらにわが学園の「高等部」が「高等学校」にグレードアップする記念すべき年になるはず

である。

#### 215 「世界が壊れそうなくらい、自由になりたい」 椎名結実 2007.11.07

あれは高校の時だった。ちょうど今くらいの時期の冷たい空気に頬をぴしゃりとやられる感覚が好きで、学校帰りに真っ暗な駅前を自転車を押しながら歩いて帰っていた日を覚えている。交差点の信号と車のヘッドライトがまぶしくて、通り過ぎる人々は皆ただの黒い人影に見えて、この時交差点に突っ込んだら死ぬのかな、そしたらどうなるんだろうと考えていた。心は何も動かなかった。「そうだ、部屋に置いてある日記を破って捨てなくちゃ」と思った。

友達に言いたかったけど言えなかったことがつづってあったから、死んだ後見られちゃ恥ずかしいと思った。だけど、それでも交差点を見る視線はぴくりともしなかった。足も、動かなかった。それから、友達のことを考えた。私が死んだら、泣かないかなと思った。不意に、父の泣き顔が浮かんだ。次に母の。私の頬に、涙が伝った。独りで、死にたくもないのに死んだあとのことを想像して、大切な人につらい想いをさせると思って止まらない涙を隠しながら帰った。

なんか馬鹿なことしてるなと思いつつながら、そんな存在の確かめを年に何回かしながら、私は生き延びてきたのだと思う。その衝動は、例えば一生懸命勉強した試験でいい結果が帰ってきた日に。友達と喋ってなんだか大切なことを教えてあげられたような気がした日にやってきた。思うように人生って行くのかもしれないと思ったら、なんだか頑張っていたことがどうでもよく感じられた。それでいいのかとか、もっと次のことをとか、どうでもよくなった。苦しんで、つらくて、涙を流している時の方が、生きているって確認する必要もなく感じられているんじゃないかと思う。同じ不安でも、具体的に「これ」だって言えるときは、「どう取りかかろう」と考えているから実はちょっと楽しいんじゃないかとも思う。もちろん、その最中にいるときは「やってられっか」と思うわけだけれど。

生きる実感と死にまつわる魅力は、現代社会の大きなひとつの特徴なんじゃないかと、たまには社会の教員らしく考えてみる。なんだか暗い話になってしまったけれど、この話を今週末、合同教研(2日目午前テーマ討論「格差社会を生きる若者たち」)でやってきます。興味のある人はよかったら私の勉強にお付き合ってください。

合同教育研究全道集会は、11月9日(金)～11日(日)、かでの2・7にて開催されます。

#### 216 第1回定期公演を終えて 椎名結実 2007.11.22

先日、演劇部第1回定期公演がやまびこ座で無事終了しました。100人近い人たちに観に来ていただき、嬉しい感想をたくさんいただくことができました。(観に来てくれたみなさん、本当にありがとうございます!)

いただいた感想はどれも好評で、全員で、焦りながら、怖がりながらも必死に作ってきた想いが伝わったのだと思うと、本当に嬉しくて。一つ一つのアンケートを見るたび、生徒の顔が思い浮かんで涙しそうになった。

何より嬉しいのは、本番終了後の部員たちの言葉。「楽しかった」「のおかげで自分は乗りきれた。ありがとう」...そうやってお互いにお礼を言い合い、学年や男女関係なく笑顔で肩を叩き合っている姿を見たら、ここ数ヶ月の疲れなどふっとんでしまった。

現金なもので、「定期公演なんて銘打ったけど、続けられるのだろうか…」と密かに不安がっていた私は、本番終了時点から「来年はどうやったらもっと余裕ある日程でできるのか」ばかり考えている。

何しろ今回は、3ヶ月前に脚本を決めてから、練習期間は（各種行事との兼ね合いで）実質1ヶ月間あるかないか。本番前日まで台本を離せずには稽古した挙句、初めて最初から最後まで通して演じられたのは、なんと本番日の午前中だった。

当然、本番中のセリフはめちゃくちゃ、音響・照明は大事な場面で大きな間違いをしている。それでも満場の拍手をもらえたのは、セリフが出なくても演技を間違えても、その場での役割に集中しようという生徒たちの必死さが伝わったからなのではないか。

（誰かが忘れたセリフを他の役者が拾う、ということが全シーンで繰り返されて、奇跡的に物語をつないでいった。「みんな、天才！」と舞台を幕の裏からのぞきながら、こっそり叫んでいたのは内緒である）。

抜きん出た力の持ち主はいないかもしれないけど、それぞれができることを必死になってやったら、本当に感動的な舞台ができた。

「俺って、すごいじゃん！」と、部員たちには素直に自分をほめてあげてほしい。そして、その次でいいから、やれたはずなのに出来なかった悔しいことを思いだしてほしい。

「定期公演」だから、今から来年度に向けてスタートが切れる。今度は同じ悔しさを繰り返さないように、1年かけて準備を進めていこう。

そして、今回影で支えてくれたスタッフや保護者の方、同級生たちに応えられる演劇部になりたい!! 顧問の夢は今ふくらんではちきれそうなのである。

今学園は、もう一つの大きな部活「プラスアンサンブル部」の定期演奏会を2週間後に控え、毎日真剣な練習が続いている。自由が丘の「天才」っ子たちは、今度はどんな姿を披露してくれるのだろうか？

今度は外側から、不安と期待を抱えながら見ていく日々が始まる…。これはこれで、落ち着かないものだと思った（笑）。

プラスアンサンブル部第2回定期演奏会は、12月9日(日)15:00 から、東区民センター大ホール(東区北11条東7丁目 地下鉄東豊線「東区役所前」駅)で行われる!!

## 217 定期演奏会 芳賀 慈 2007.12.04

放課後の学園には、楽器の音がブカブカ響く。定期演奏会が近い、プラスアンサンブル部の練習時間だ。メロディーが短く切れて、数分後に同じところが聞こえる。そしてまた静かになり、再び繰り返される。

お昼休みも寸暇を惜しんで練習の音が聞こえる。てっきり顧問の指導のもと、と思ったら、新藤さんは昼食を買いにコンビニにいたりする。もっとうまくなりたいと自主的に活動する彼らの姿は、この上なく格好良い。練習量に比例して、腕も上がっている（と思う）。音楽には不思議な魅力がある。言葉を使わないのに気持ちが伝わり、懐かしい情景が思い出され、泣けてきたりするのだ。

先月の演劇部定期公演も素晴らしかった。最前列に陣取ってゆっくり観ることはできなかったけれど、ナマの芝居はやっぱりワクワクする。何たって生徒たちの表情が良い。こ

ここまで積み上げてきたものの大きさに、彼らも気づいているのだろう。

今週末はブル部の演奏会だ。演劇はもともと好きだったけれど、演奏会を楽しみにする自分というのも新鮮で何だか嬉しい。そんなわけで、12月9日は、皆さんぜひ東区民センターへお出でください。開演 15:00、大ホールにて、入場無料です。

## 218 大人の時間と子どもの時間 杉野建史 2007.12.05

むかし、ある時間からは「大人の時間だよ」と言われて起きていることができなかった。眠くなくても布団に入り、目をつぶって...知らぬうちに眠っていた。その大人の時間にどんな美味しい物を食べ、面白いテレビ番組を見ていたかは当然知るよしもない。

大人の時間にあこがれ、大人になったら時間が沢山あるからこれもやって、あれもやっていると考えていたが、いざ大人になってみると大した“特別な時間”ではないのだ。やり残した仕事を片づけたり、自分の頭の中を整理したり、野望をメラメラと燃やしたりであつという間に時間がなくなってしまう。大人には少なからず「責任」が付きまとう。責任に拘束された時間に生活の多くの時間を占領されている。大人になるとか、社会人になるとかいうことはこういうことなのだろうと思う。子どもにもある程度の「責任」はあるが、当然大人のそれとは違う。大人になってみると「子どもの時間」にあこがれる。

「自由な時間」が保証されている。このことは子どもが自覚することは少々難しいことかもしれないが、このことを自覚していると思われる生徒の動きは他の生徒と違うと感じる。迷いを持ちながら生活していても、迷いの中にその子どもの持つベクトルを感じ取れるのだ。このベクトルは一方向を指していないことが多いが、それぞれの方向にいろいろな場面でその子どもの力がはたらく。この時間がある程度保証することが、今の大人には必要である。

子どもの時間と大人の時間に物理的な違いはないのだが、4次元的(?)な違いを持っていることを理解して「子どもの時間」に付き合うことが大切な場面もあるということ、大人の時間に思い出すようにしている。

## 219 しあわせ 田房絢子 2007.12.07

先日、毎度なじみの長沼へ行ってきた。とはいうものの、仕事やら風邪やらで3ヶ月ほど日曜喫茶を欠席。久しぶりの田舎訪問がちょっと楽しみだった。

みんな「あやちゃ～ん、元気だった??」と声をかけてくれる。「ひさしぶりだねえー」「すっかり寒くなりましたねえー」なんて、のんびりした会話を交わす。いない間も、「あやちゃん、どうしたの?」とマスターに声をかけてくれたりしたらしい。いつも大事な会合をしているわけじゃないけど、そこはたしかにみんなの内に存在していて、自然とスケジュールに組み込まれる。何の気なしに集まって、最近は薪ストーブや石炭ストーブにあたりながら談笑する。そして、そこで必要とされていることに“しあわせ”を感じる。「あやちゃ～ん、あやちゃ～ん」と用事を言いつけられて、くつついてくる犬たちとせかせかと歩き回る時間が、なんともいえずゆっくりとまったりと、私の中をあったかく流れていく。

久しぶりにあった犬たちが私を見て駆け寄って、飛びかかって喜んでくれたこと。あるお母さんに育児のことで相談され、ほかのお母さんと3人でたくさん話した後に、「今日

はほんとにいい話が出来たよ。」とっていただいたこと。薪ストーブに「たま(犬)」と一緒にあたりながら、くすぶる木炭をみていたこと。たくさんのパンやケーキの差し入れをおいしくいただいたこと。野菜だけで煮込んだ、大地の味がたっぷりのスープをいただいたこと。飼っている羊の毛を紡いだ毛糸と、繭を染めた金色の糸で編んだ帽子をプレゼントしていただいたこと。

たくさんのしあわせも、私の中であったかく流れた一日だった。

## 220 反省会(ブル部第2回定期演奏会・後記 その1) 新藤 理 2007.12.14

「新藤さんは厳しい。もっと吹いてるほうの気持ちも察してほしい」とある生徒は言う。「もっと強く注意してほしい。しっかり言われないと、『こんなもんでいいのかなあ』って思っちゃいそうな気がする」と別の生徒は言う。

ブル部の定期演奏会が終わった、その翌日。反省会の席で、部員一人ずつが想いを語った。あふれんばかりの本当の気持ちがそこにあった。音楽経験がなく、戸惑いながらも入部を決意した日から今日までのこと。それでも、何か生活に張り合いができていったこと。思ったとおりに吹けないことがどんなに悔しかったか、それが本当に少しでもできるようになった時のことをどんなに鮮明に覚えているか。今までの自分、今までのブル部と何が違ったか。「成長した」といろいろな人に言っていただけたし自分たちでもそう思う、そのことの意味は何なのか。

そして誰もが口にしたのは、「練習でできなかったところが本番でなぜかできた。でもその逆もいっぱいあった」ということ、「裏方でも演奏でも、終わった後の片付けでも、どれだけ多くの人に支えられて本番が成り立ったのかよくわかった」こと。それだけでも、彼らにとって、いつもの練習場所を飛び出して本番の舞台を踏んだことがどんなに大切な経験だったのか、よくわかる。練習にかけた長い時間は、もちろん何よりも大切なものだ。ただ、そこから本番を迎えて初めてわかることが、やはりたくさんある。

想いは顧問のわたしにも向かってくる。定期演奏会までに届けられなかった彼らからの願いがどんなにあったか、わたしは思い知る。でも、生徒たち同士がその願いに異を唱えて、意見が深まったりもする。わたしはわたしで、少しずつ、あえて口に出さずにいた本当の気持ちを伝えていく。

過去にブル部を退部し、再入部した部員が「前はいろいろ考えてブル部を辞めて、でも今こうしてブル部にいて...今となっては、『辞めよう』なんて少しも思わないんだよね。なんでかな」と言う。なんでなんだろう。わからない。わかっても、それはきっと言葉にはならない。いや、音楽に対する、仲間に対する気持ちというのは、そもそも言葉に置き換えようがないものなのかもしれない。反省会はそれをどうにかして言葉にまとめようとみんなで四苦八苦する、なんとも不器用な、大切な時間だった。ああ、疲れたなあ。

応援して下さったすべてのみなさんのおかげで、私たちの第2回定期演奏会がありました。大切な経験を本当にありがとうございました。

## 221 内視鏡検査 亀貝一義 2007.12.20

毎年定期的に受けているものが2つある。胃と大腸を内視鏡で点検することだ。胃カメラはお医者さんから年に2回は必要といわれている。これを正確に守っているわけではな

いが、だいたい1年に1, 2回の検診は受けている。もう胃カメラは20年近く前からだ。最近、お医者さんから言われることが増えてきた。「心配はないとは思いますが、念のために細胞を検査しましょう」だ。そして検査の結果が1, 2週間後に封書で来て「異常ありません」という。

大腸検査も毎年受けているのだが、この内視鏡検査というのも「気色」が悪い。それにしても、こういう検査をすることができるカメラを発明した人はたいした人だと思う。その昔、NHKテレビの「プロジェクトX」という番組があって、この胃カメラの発明談が放映された。このカメラの最初のテストは不細工な形のカメラをまっすぐに胃に入れたとあった。この内視鏡は戦後の発展というのだから、まだ半世紀強の歴史しかない。

今回(15日)の胃カメラは、少々きつかった。食道の方もちょっと調べてみましょうということで、すみっこの方までカメラを押しこんだのでけっこう苦しい思いをした。結果はまだ分からない。この内視鏡検査とあわせて超音波検査も受けたが、これは特にどうということはないが、これについても言われることが増えてきた。「肝臓が」とか何とかが...というように。いずれも「心配なことではありませんが...」というわけだ。しかし大変なことが体内で始まっている、お医者さんは「大して心配なことではないが念のために...」などという言葉で患者にいうのだろう。

来年の4月か5月に、今度は大腸カメラと胃カメラの2つを入れなければならない。この先生は、私と同じ年だが、自分の検査をきちんとしているのかな、と心配だ。

#### 222 あげる 芳賀 慈 2007.12.26

「あげる」という言葉が苦手だ。「手伝ってあげる」「持ってあげる」は何だか押しつけがましい気がして、つい「手伝っていない」という気になってしまう。

この「あげる」が最近いろいろなところに登場している。「お塩をひとつまみいれてあげると、味がひきしまる」とか「両辺を3で割ってあげればいい」という風に。この場合親切を施している相手は誰(何)? 煮込まれているシチューであり、計算式なのか。それとも聞いた感じがやわらかいと一般的には思われているのか。

このテの議論は新聞紙上などにはとても多くて、私はいつも面白がってそれを読むのだけれど、語源の知識がないので解明には時間がかかる。聞くところによると、「最近の言葉の乱れ」などという言い回しは、平安時代からあったらしい。まさに言語は生きものである。

2007年もあと少し。何だかいつもせわしなく過ごしている気がする。来年はもうちょっと自分に時間をかけてあげたいと思う。

#### 223 第1期生同窓会(「一期一会」) 亀貝一義 2007.12.29

先日、わが学園の第1期生諸君の同窓会があり参加した。2005年の卒業生である。入学式の時の生徒は11人だったが、その3年後の卒業は23人になっていた。13人が同窓会にはせ参じた。どの顔も(当たり前だが)生き生きしていたし、はれやかだった。

私もこれまでの40年間以上の教員生活の中でたくさんの生徒たちを送り出したので、毎年のように「同窓会」「クラス会」などが開かれるし、極力参加することにしている。「あまり変わっていませんね」などという“心にもない”言葉を聞くこともあるが、元気

で過ごしていることを知るとうれしい。もっとも元気でない人は来ないのだから当然ではあるのだが、「元気でない卒業生たち」の消息を知ることができる。

札幌自由が丘学園の第1期生諸君も「思った以上に」(本当に)元気であった。よく言われるのだが「あの子が!」という生徒が思った以上に頑張っていることを知ると「よかった」と感じる。手間のかかった子どもの方が心配であるというのはどんな親も教師も同じだろう。

Aは福祉の仕事をしている。彼はそれとは違う目標を(入学の時)語っていた。BやC、それぞれがまだ正規社員ではないが、しっかり働いている。Dもコンビニの店長だそう。その他、専門学校に通いながら「通関の仕事」に就くべく努力している「あのT」が来ていた。結婚するかどうかを真剣に考えているというHもいた。家の仕事に継ぐかも知れないIや大学生活を満喫しているJやKもいる。まだ本学園を卒業しきれていないLが来てくれていた。屈託のない笑顔が可愛い。「軍艦」が職場であるMはいない。戦争になれば動員されるだろう。これを阻止するために憲法9条はどうしても堅持したいものだと思う。ウイークディの夜8時半からの同窓会。もっと違う日程でやってくれたら、と小言を言って10時前に退席したのだが、翌日Nから「カメさんが無事帰ることができたかどうか心配していました。無事でしたか?」という電話が学園にあった。

「スタッフ・エッセイ」のスタートは1期生が卒業した05年4月である。最初は私が「一期一会」のテーマで記したが、今回はその時から数えて223回目である。やはり「一期一会」の意味をあらためて考えさせられた1期生の同窓会であった。来年もまた新しい出会いが生まれるに違いない。

#### 224 2007年、旅立ち。 田房絢子 2007.12.30

一人で暮らし始めてから、5ヶ月近くになる(29歳でやっと巣立ちです)。祖父母は私の顔を見るたびに「帰ってこい、なぜ家があるのに出て行かなければならないのだ」と嘆く。母親は私の顔を見るたびに、「いやになったら強がらないで帰ってくればいいんだからね」と諭す。「一応、アメリカでは2年間一人暮らししてきたんですけど・・・今もちゃんと生活してるんですけど・・・もうすぐ30歳なんですけど・・・」とみんなの顔を見るたびに、私は説明する。

本音を言うと、寂しいとか苦しいとかは全然ない。たしかに熱が出たとき、ちょっとだけ不安になったのはある。でもそれ以外は快適そのもの。一番落ち着くのは自分の「家」になった。気楽な快適一人暮らし。自由自由!

というのも確かに本音の一部だけど、それ以上に仕事と家事の両立の大変さや、自活するという現実を知ることができたのは大きい。元々は父親に「おまえは自分の金で生活する大変さを知らなければだめだ」と言われて、ここぞとばかりに家を出た。確かに、今でも親のスネかじりで、甘ったれのお嬢ちゃまと言われれば、返す言葉がない。でも今年、ほんの少しだけけど、一人で歩き始めた。

仕事の後に家事をする大変さや、家計を考えての生活は、「おかあさん、いままでほんとうにありがとう」と言いたくなる。でも最近ちょっとサボり癖、手抜き癖がついてきた。ああ、いかんいかん!このままでは「ちゃんと生活してるよ」なんて、胸を張っていられなくなる。

2008年、ぶっちゃん30歳。仕事も家事もしっかりこなせる女性になるのがまず目標！

**225 それでも歩き続ける 杉野建史 2008.01.01**

昨年、学園には大きな出来事が2つあった。とても悲しい出来事（どれだけ言葉を繋いでも表すことの出来ないこと）と、近い将来に学園職員と保護者の方々や学園を応援してくださっているの方々全員で喜べるだろう出来事である。

私が社会人になった時からの夢を2008年は是が非でも叶えたい。それはまさしく自分の夢であり、子どもたちにとって希望と夢がもてる未来づくりの1つになるだろうと確信している。子どもたちが胸を張って自分の「母校は札幌自由が丘学園です」と言えるようにすることが私の使命だと自覚している。自分達に出来ること、自分達がやりたいこと、自分達であれば受けとめられる子どもたちと教育実践ができるような学校をつくりたい。それは小さな規模で、落ち着いている「札幌で一番小さな学校」である。日本ではいわゆる「1条校」が学校として認可されている。私達の現在はその「1条校」ではない。北海道教育委員会に指定されている技能教育のための施設ではあるが、高等部の子どもたちの母校（出身校）は連携している通信制の高校である。

子どもたちと共に歩きながら学校をつくることに意味があると思う。日頃の学校生活で上手くいかないことや様々な悩み、実践の失敗や反省が沢山ある。やらなければならないことも沢山ある。目の前の子どもたちを蔑ろには出来ない。子どもたちは常に待ったなしである。私達は子どもたちに悩まされ泣かされる。それと同じだけ子どもたちの真剣な顔と笑顔に救われる。多くの方から「大丈夫ですか。心配です。」と声をかけていただく。私達の実践が頼りなく感じたり、不安に感じたり、不満を感じるたりすることがあるのだろう。それらに向き合い改善することも大切である。

いろいろなことが沢山ある。宿題もあるし予習も必要である。

夢の実現に向けて、私達はそれでも歩き続ける。